猿面冠者

太宰治

青空文庫

目次

海潮音

どんな小説を讀ませても、はじめの二三行をはしり讀みしたばかりで、もうその小説の樂屋裏を見拔いてしまつたかのやうに、鼻で笑つて卷を閉ぢる傲岸不遜の男がゐた。ここに露西亞の詩人の言葉がある。「そもさん何者。されば、わづかにまねごと師。氣にするがものもない幽靈か。ハロルドのマント羽織つた莫斯科ツ子。他人の癖の飜案か。はやり言葉の辭書なのか。いやさて、もぢり言葉の詩とでもいつたところぢやないかよ。」いづれそんなところかも知れぬ。この男は、自分では、すこし詩やら小説やらを讀みすぎたと思つて悔いてゐる。この男は、思案するときにでも言葉をえらんで考へるのださうである。心のなかで自分のことを、彼、と呼んでゐる。酒に醉ひしれて、ほとんど我をうしなつてゐるやうに見えるときでも、もし誰かに毆られたなら、落ちついて呟く。「あなた、後悔しないやうに。」ムイシユキン公爵の言葉である。戀を失つたときには、どう言ふであらう。そのときには、口に出しては言はぬ。胸のなかを駈けめぐる言葉。「だまつて居れば名を呼ぶし、近寄つて行けば逃げ去るのだ。」これはメリメのつつましい述懷ではなかつたか。夜、寢床にもぐつてから眠るまで、彼は、まだ書かぬ彼の傑作の妄想にさいなまれる。そのときには、ひくくかう叫ぶ。「放してくれ！」これはこれ、藝術家のコンフイテオール。それでは、ひとりで何もせずにぼんやりしてゐるときには、どうであらう。口をついて出るといふのである、〝Nevermore〟といふ獨白が。

そのやうな文學の糞から生れたやうな男が、もし小説を書いたとしたなら、いつたいどんな

ものができるだらう。だいいちに考へられることは、その男は、きつと小説を書けないだらうと言ふことである。一行書いては消し、いや、その一行も書けぬだらう。彼には、いけない癖があつて、筆をとるまへに、もうその小説に謂はばおしまひの磨きまでかけてしまふらしいのである。たいてい彼は、夜、蒲團のなかにもぐつてから、眼をぱちぱちさせたり、にやにや笑つたり、せきをしたり、ぶつぶつわけのわからぬことを呟いたりして、夜明けちかくまでかかつてひとつの短篇をまとめる。傑作だと思ふ。それからまた彼は、書きだしの文章を置きかへてみたり、むすびの文字を再吟味してみたりして、その胸のなかの傑作をゆつくりゆつくり撫でまはしてみるのである。そのへんで眠れたらいいのであるが、いままでの經驗からしてそんなに工合ひがよくいつたことはいちどもなかつたといふ。そのつぎに彼は、その短篇についての批評をこころみるのである。誰々は、このやうな言葉でもつてほめて呉れる。誰々は、判らぬながらも、この邊の一箇所をぽつんと突いて、おのれの慧眼を誇る。けれども、おれならば、かう言ふ。男は、自分の作品についてのおそらくはいちばん適確な評論を組みたてはじめる。この作品の唯一の汚點は、などと心のなかで呟くやうになると、もう彼の傑作はあとかたもなく消えうせてゐる。男は、なほも眼をぱちぱちさせながら、雨戸のすきまから漏れて來る明るい光線を眺めて、すこし間抜けづらになる。そのうちにうつらうつらまどろむのである。

けれども、これは問題に對してただしく答へてゐない。問題は、もし書いたとしたなら、といふのである。ここにあります、と言つて、ぽんと胸をたたいて見せるのは、なにやら水際だ

つていいやうであるが、聞く相手にしては、たちのわるい冗談としか受けとれまい。まして、この男の胸は、扁平胸といつて生れながらに醜くおしつぶされた形なのであるから、傑作は胸のうちにありますといふ彼のそのせいいつぱいの言葉も、いよいよ藝がないことになる。こんなことからしても、彼が一行も書けぬだらうといふ解答のどんなに安易であるかが判るのである。もし書いたとしたなら、といふのである。問題をもつと考へよくするために、彼のどうしても小説を書かねばならぬ具體的な環境を簡單にこしらへあげてみてもよい。たとへばこの男は、しばしば學校を落第し、いまは彼のふるさとのひとたちに、たからもの、といふ蔭口をきかれてゐる身分であつて、ことし一年で學校を卒業しなければ、彼の家のはうでも親戚のものたちへの手前、月々の送金を停止するといふあんばいになつてゐたとする。また假にその男が、ことし一年で卒業できさうもないばかりか、どだい卒業しようとする腹がなかつたとしたなら、どうであらう。問題をさらに考へよくするために、この男がいま獨身でないといふことにしよう。四五年もまへからの妻帶者である。しかも彼のその妻といふのは、とにかく育ちのいやしい女で、彼はこの結婚によつて、叔母ひとりを除いたほかのすべての肉親に捨てられたといふ、月並みのロマンスを匂はせて置いてもよい。さて、このやうな境遇の男が、やがて來る自鬻の生活のために、どうしても小説を書かねばいけなくなつたとする。しかし、これも唐突である。亂暴でさへある。生活のためには、必ずしも小説を書かねばいけないときまつて居らぬ。牛乳配達にでもなればいいぢやないか。しかし、それは簡單に反駁され得る。乘りかかつた船、と

いふ一言でもつて充分であらう。

いま日本では、文藝復興とかいふ譯のわからぬ言葉が聲高く叫ばれてゐて、いちまい五十錢の稿料でもつて新作家を搜してゐるさうである。この男もまた、この機を逃さず、とばかりに原稿用紙に向つた、とたんに彼は書けなくなつてゐたといふ。ああ、もう三日、早かつたならば。或ひは彼も、あふれる情熱にわななきつつ十枚二十枚を夢のうちに書き飛ばしたかも知れぬ。毎夜、毎夜、傑作の幻影が彼のうすつぺらな胸を騷がせては呉れるのであつたが、書かうとすれば、みんなはかなく消えうせた。だまつて居れば名を呼ぶし、近寄つて行けば逃げ去るのだ。メリメは猫と女のほかに、もうひとつの名詞を忘れてゐる。傑作の幻影といふ重大な名詞を！

男は奇妙な決心をした。彼の部屋の押入をかきまはしたのである。その押入の隅には、彼が十年このかた、有頂天な歡喜をもつて書き綴つた千枚ほどの原稿が曰くありげに積まれてあるのださうである。それを片つぱしから讀んでいつた。ときどき頬をあからめた。二日かかつて、それを全部讀みをへて、それから、まる一日ぼんやりした。そのなかの「通信」といふ短篇が頭にのこつた。それは、二十六枚の短篇小説であつて、主人公が困つてゐるとき、どこからか差出人不明の通信が來てその主人公をたすける、といふ物語であつた。男が、この短篇にことさら心をひかれたわけは、いまの自分こそ、そんなよい通信を受けたいものだと思つたからであらう。これを、なんとかしてうまく書き直してごまかさうと決心したのである。

まづ書き直さねばいけないところは、この主人公の職業である。いやはや。主人公は新作家なのである。かう直さうと思つた。さきに文豪をこころざして、失敗して、そのとき第一の通信。つぎに革命家を夢みて、敗北して、そのとき第二の通信。いまは、サラリイマンになつて家庭の安樂といふことにつき疑ひ惱んで、そのとき第三の通信。こんなふうに、だいたいの見とほしをつけて置く。主人公を、できるだけ文學臭から遠ざけること。さうして革命家をこころざしてからは、文學のブの字も言はせぬこと。自分がそのやうな境遇にあつたとき、心から欲しいと思つた手紙なり葉書なり電報なりを、事實、主人公が受けとつたことにして書くのだ。これは樂しみながら書かねば損である。甘さを恥かしがらずに平氣な顏をして書かう。男は、ふと、「ヘルマンとドロテア」といふ物語を思ひ合せた。つぎつぎと彼を襲ふあやしい妄念を、はげしく首振つて追ひ拂ひつつ、男はいそいで原稿用紙にむかつた。もつと小さい小さい原稿用紙だつたらいいなと思つた。自分にも何を書いてゐるのか判らぬくらゐにくしやくしやと書けたらいいなと思つた。題を「風の便り」とした。書きだしもあたらしく書き加へた。かう書いた。

——諸君は音信をきらひであらうか。諸君が人生の岐路に立ち、哭泣すれば、どこか知らないところから風とともにひらひら机上へ舞ひ來つて、諸君の前途に何か光を投げて呉れる、そんな音信をきらひであらうか。彼は仕合せものである。いままで三度も、そのやうな胸のときめく風の便りを受けとつた。いちどは十九歲の元旦。いちどは二十五歲の早春。いまいちどは、

つい昨年の冬。ああ。ひとの幸福を語るときの、ねたみといつくしみの交錯したこの不思議なよろこびを、君よ知るや。十九歳の元旦のできごとから物語らう。

そこまで書いて、男は、ひとまづペンを置いた。やや意に滿ちたやうであつた。さうだ、この調子で書けばいいのだ。やはり小説といふものは、頭で考へてばかりゐたつて判るものではない。書いてみなければ。男は、しみじみさう心のうちで呟き、さうしてたいへんたのしかつたといふ。發見した、發見した。小説は、やはりわがままに書かねばいけないものだ。試驗の答案とは違ふのである。よし。この小説は唄ひながら少しづつすすめてゆかう。けふは、ここまでにして置くのだ。男は、もいちどそつと讀みかへしてみてから、その原稿を押入のなかに仕舞ひ込み、それから、大學の制服を着はじめた。男は、このごろたえて學校へ行かないのであるが、それでも一週間に一二度づつ、かうして制服を着て、そはそは外出するのである。彼等夫婦は或る勤人の二階の六疊と四疊半との二間を借りて住ひしてゐるのであつて、男はその勤人の家族への手前をつくろひ、ときどきこんなふうに登校をよそふのであつた。男には、こんな世間ていを氣にする俗な一面もあつたわけである。またこの男は、どうやら自分の妻にさへ、ていさいをとりつくろつてゐるやうである。その證據には、彼の妻は、彼がほんたうに學校へ出てゐるものだと信じてゐるらしいのだ。妻は、まへにも假定して置いたやうに、いやし

い育ちの女であるから、まづ無學だと推測できる。男は、その妻の無學につけこみ、さまざまの不貞を働いてゐると見てよい。けれども、だいたいは愛妻家の部類なのである。なぜと言ふに、彼は妻を安心させるために、ときたま嘘を吐くのである。輝かしい未來を語る。

その日、彼は外出して、すぐ近くの友人の家を訪れた。この友人は、獨身者の洋畫家であつて、彼とは中學校のとき同級であつたとか。うちが財産家なので、ぶらぶら遊んでゐる。人と話をしながら眉をしじゆうぴりぴりとそよがせるのが自慢らしい。よくある型の男を想像してもらひたい。その友人の許へ、彼は訪れたのである。彼は、もともとこの友人をあまり好きではないのである。さう言へば、彼は、彼のほかの二三の友人たちをもたいして好いてはゐないのであるが、ことにこの友人が、相手をいらいらさせる特種の技倆を持つてゐるので、彼はことにも好きになれないのださうである。彼がでもこの友人を、けふ訪問したのは、まづ手近なところから彼の歡喜をわけてやらうといふ心からにちがひない。この男は、いま、幸福の豫感にぬくぬくと温まつてゐるらしいが、そんなときには、人は、どこやら慈悲深くなるものらしい。洋畫家は在宅してゐた。彼は、この洋畫家と對座して、開口一番、彼の小説のことを話して聞かせた。おれはかういふ小説を書きたいと思つてゐる、とだいたいのプランを語つて、うまく行けば賣れるかも知れないよ、書きだしはこんな工合ひだ、と彼はたつたいま書いて來た五六行の文章を、頬をあからめながらひくく言ひだしたのである。彼は、いつでも自分の文章をすべて暗記してゐるのださうである。洋畫家は、れいの眉をふるはせつつ、それはいいと吃

るやうにして言つた。それだけでたくさんなのに、要らないことをせかせか、つぎからつぎとしやべりはじめた。虚無主義者の神への揶揄であるとか、小人の英雄への反抗であるとか、それから、彼にはいまもつてなんのことやら譯がわからぬのであるが、觀念の幾何學的構成であるとさへ言つた。彼にとつては、ただこの友人が、それはいい、おれもそんな風の便りが欲しいよ、と言つて呉れたら滿足だつたのである。批評を忘れやうとして、ことさらに、「風の便り」などといふロマンチツクな題材をえらんだ筈である。それを、この心なき洋畫家に觀念の機何學的構成だとかなんだとか、新聞の一行知識めいた妙な批評をされて、彼はすぐ、これは危いと思つた。まごまごして、彼もその批評の遊戲に誘ひこまれたなら、「風の便り」も、このあと書きつづけることができなくなる。危い。男は、その友人の許からそこそこにひきあげたといふ。

そのまま、すぐうちへ歸るのも工合ひがわるいし、彼はその足で、古本屋へむかつた。みちみち男は考へる。うんといい便りにしよう。第一の通信は、葉書にしよう。少女からの便りである。短い文章で、そのなかには、主人公をいたはりたい心がいつぱいにあふれてゐるやうなそんな便りにしたい。「私、べつに惡いことをするのではありませんから、わざと葉書にかきます。」といふ書きだしはどうだらう。主人公が元旦にそれを受けとるのだから、いちばんおしまひに、「忘れてゐました。新年おめでたうございます。」と小さく書き加へてあることにしよう。すこし、とぼけすぎるかしら。

男は夢みるやうな心地で街をあるゐてゐる。自動車に二度もひかれそこなつた。

第二の通信は、主人公がひところはやりの革命運動をして、牢屋にいれられたとき、そのとき受けとることにしよう。「彼が大學へはひつてからは、小説に心をそそられなかつた。」とはじめから斷つて置かう。主人公はもはや第一の通信を受けとるまへに、文豪になりそこねて痛い目に逢つてゐるのだから。男は、もう、そのときの文章を胸のなかに組立てはじめた。「文豪として名高くなることは、いまの彼にとつて、ゆめのゆめだ。小説を書いて、たとへばそれが傑作として世に喧傳され、有頂天の歡喜を得たとしても、それは一瞬のよろこびである。おのれの作品に對する傑作の自覺などあり得ない。はかない一瞬間の有頂天がほしくて、五年十年の屈辱の日を送るといふことは、彼には納得できなかつた。」どうやら演説くさくなつたな。男はひとりで笑ひだした。「彼にはただ、情熱のもつとも直截なはけ口が欲しかつたのである。考へることよりも、唄ふことよりも、だまつてのそのそ實行したはうがほんたうらしく思へた。ゲエテよりもナポレオン。ゴリキイよりもレニン。」やつぱり少し文學臭い。この邊の文章には、文學のブの字もなくしなければいけないのだ。まあ、いいやうになるだらう。あまり考へすごすと、また書けなくなる。つまり、この主人公は、銅像になりたく思つてゐるのである。このポイントさへはづさないやうにして書いたなら、しくじることはあるまい。それから、この主人公が牢屋で受けとる通信であるが、これは長い長い便りにするのだ。われに策あり。たとへ絶望の底にゐる人でも、それを讀みさへすれば、もういちど陣營をたて直さうと

いふ氣が起らずにはすまぬ。しかも、これは女文字で書かれた手紙だ。「ああ。様といふ字のこの不器用なくづしかたに、彼は見覺えがあつたのである。五年前の賀状を思ひ出したのであつた。」

第三の通信は、かうしよう。これは葉書でも手紙でもない、まつたく異様な風の便りにしよう。通信文のおれの腕前は、もう見せてあるから、なにか目さきの變つたものにするのだ。銅像になりそこねた主人公は、やがて平凡な結婚をして、サラリイマンになるのであるが、これは、うちの勤人の生活をそのまま書いてやらう。主人公が家庭に倦怠を感じはじめてゐる矢先。冬の日曜の午後あたり、主人公は縁側へ出て、煙草をくゆらしてゐる。そこへ、ほんたうに風とともに一葉の手紙が、彼の手許へひらひら飛んで來た。「彼はそれに眼をとめた。妻がふるさとの彼の父へ林檎が着いたことを知らせにしたためた手紙であつた。投げて置かないで、すぐ出すといい。さう呟きつつ、ふと首をかしげた。ああ。様といふ字のこの不器用なくづしかたに彼は見覺えがあつたのである。」このやうな空想的な物語を不自然でなく書くのには、燃える情熱が要るらしい。こんな奇遇の可能を作者自身が、まじめに信じてゐなければいけないのだ。できるかどうか、とにかくやつてみやう。男は、いきほひこんで古本屋にはひつたのである。

ここの古本屋には、「チエホフ書翰集」と「オネーギン」がある筈だ。この男が賣つたのだから。彼はいま、その二冊を讀みかへしたく思つて、この古本屋へ來たわけである。「オネー

ギン」にはタチアナのよい戀文がある。二册とも、まだ賣れずにゐた。さきに「チエホフ書翰集」を棚からとりだして、そちこち頁をひつくりかへしてみたが、あまり面白くなかつた。劇場とか病氣とかいふ言葉にみちみちてゐるのであつた。これは「風の便り」の文獻になり得ない。傲岸不遜のこの男は、つぎに「オネーギン」を手にとつて、その戀文の條を捜した。すぐ捜しあてた。彼の本であつたのだから。「わたしがあなたにお手紙を書くそのうへ何をつけたすことがいりませう。」なるほど、これでいいわけだ。簡明である。タチアナは、それから、神樣のみこころ、夢、おもかげ、囁き、憂愁、まぼろし、天使、ひとりぼつち、などといふ言葉を、おくめんもなく並べたててゐる。さうしてむすびには、「もうこれで筆をおきます。讀み返すのもおそろしい、羞恥の念と、恐怖の情で、消えもいりたい思ひがします。けれども私は、高潔無比のお心をあてにしながら、ひと思ひに私の運を、あなたのお手にゆだねます。タチアナより。オネーギン樣。」こんな手紙がほしいのだ。はつと氣づいて卷を閉ぢた。危險だ。影響を受ける。いまこれを讀むと害になる。はて。また書けなくなりさうだ。男は、あたふたと家へかへつて來たのである。

家へ歸り、いそいで原稿用紙をひろげた。安樂な氣持で書かう。甘さや通俗を氣にせず、らくらくと書きたい。ことに彼の舊稿「通信」といふ短篇は、さきにも言つたやうに、謂はば新作家の出世物語なのであるから、第一の通信を受けとるまでの描寫は、そつくり舊稿を書きうつしてもいいくらゐなのであつた。男は、煙草を二三本つづけざまに吸つてから、自信ありげ

にペンをつまみあげた。にやにやと笑ひだしたのである。これはこの男のひどく困つたときの仕草らしい。彼はひとつの難儀をさとつたのである。文章についてであつた。舊稿の文章は、たけりたけつて書かれてゐる。これはどうしたつて書き直さねばなるまい。こんな調子では、ひともおのれも樂しむことができない。だいいち、ていさいがわるい。めんだうくさいが、これは書き改めよう。虚榮心のつよい男はさう思つて、しぶしぶ書き直しはじめた。

わかい時分には、誰しもいちどはこんな夕を經驗するものである。彼はその日のくれがた、街にさまよひ出て、突然おどろくべき現實を見た。彼は、街を通るひとびとがことごとく彼の知合ひだつたことに氣づいた。師走ちかい雪の街は、にぎはつてゐた。彼はせはしげに街を往き來するひとびとへいちいち輕い會釋をして歩かねばならなかつた。とある裏町の曲り角で思ひがけなく女學生の一群と出逢つたときなど、彼はほとんど帽子をとりさうにしたほどであつた。

彼はそのころ、北方の或る城下まちの高等學校で英語と獨逸語とを勉強してゐた。彼は英語の自由作文がうまかつた。入學して、ひとつきも經たぬうちに、その自由作文でクラスの生徒たちをびつくりさせた。入學早々、ブルウル氏といふ英人の教師が、What is Real Happiness? といふことについて生徒へその所信を書くやう命じたのである。ブルウル氏は、その授業はじ

めに、My Fairyland といふ題目でいつぷう變つた物語をして、その翌る週には、The Real Cause of War について一時間主張し、おとなしい生徒を戰慄させ、やや進歩的な生徒を狂喜させた。文部省がこのやうな教師を雇ひいれたことは手柄であつた。ブルウル氏は、チエホフに似てゐた。鼻眼鏡を掛け短い顎鬚を内氣らしく生やし、いつもまぶしさうに微笑んでゐた。英國の將校であるとも言はれ、名高い詩人であるとも言はれ、老けてゐるやうであるが、あれでまだ二十代だとも言はれ、軍事探偵であるとも言はれてゐた。そのやうに何やら神祕めいた雰圍氣が、ブルウル氏をいつそう魅惑的にした。新入生たちはすべて、この美しい異國人に愛されようとひそかに祈つた。そのブルウル氏が、三週間目の授業のとき、だまつてボオルドに書きなぐつた文字が What is Real Happiness? であつた。いづれはふるさとの自慢の子、えらばれた秀才たちは、この輝かしい初陣に、腕によりをかけた。彼もまた、罫紙の塵をしづかに吹きはらつてから、おもむろにペンを走らせた。Shakespeare said,[1] ——流石におほげさすぎると思つた。顔をあからめながら、ゆつくり消した。右から左から前から後から、ペンの走る音がひくく聞えた。彼は頬杖ついて思案にくれた。彼は書きだしに凝るはうであつた。どのやうな大作であつても、書きだしの一行で、もはやその作品の全部の運命が決するものだと信じてゐた。よい書きだしの一行ができると、彼は全部を書きをはつたときと同じやうにぼんやりした間抜け顔になるのであつた。彼はペン先をインクの壺にひたらせた。なほすこし考へて、それからいきほひよく書きまくつた。Zenzo Kasai, one of the most unfortunate Japanese novelists at present, said,

“——葛西善藏は、そのころまだ生きてゐた。いまのやうに有名ではなかつた。一週間すぎて、ふたたびブルウル氏の時間が來た。お互ひにまだ友人になりきれずにゐる新入生たちは、教室のおのおのの机に坐つてブルウル氏を待ちつつ、敵意に燃える瞳を煙草のけむりのかげからひそかに投げつけ合つた。寒さうに細い眉をすぼませて教室へはひつて來たブルウル氏は、やがてほろにがく微笑みつつ、不思議なアクセントでひとつの日本の姓名を呟いた。彼の名であつた。彼はたいぎさうにのろのろと立ちあがつた。頬がまつかだつた。ブルウル氏は、彼の顔を見ずに言つた。Most Excellent! 教壇をあちこち歩きまはりながらうつむいて言ひつづけた。Is this essay absolutely original? 彼は眉をあげて答へた。Of course. クラスの生徒たちは、どつと奇怪な喚聲をあげた。ブルウル氏は蒼白の廣い額をさつとあからめて彼のはうを見た。すぐ眼をふせて、鼻眼鏡を右手で輕くおさへ、If it is, then it shows great promise and not only this, but shows some brain behind it. と一語づつ區切つてはつきり言つた。彼は、ほんたうの幸福とは、外から得られぬものであつて、おのれが英雄になるか、受難者になるか、その心構へこそほんたうの幸福に接近する鍵である、といふ意味のことを言ひ張つたのであつた。彼のふるさとの先輩葛西善藏の暗示的な述懷をはじめに書き、それを敷衍しつつ筆をすすめた。彼は葛西善藏といちども逢つたことがなかつたし、また葛西善藏がそのやうな述懷をもらしてゐることも知らなかつたのであるが、たとへ嘘でも、それができてあるならば、葛西善藏はきつと許してくれるだらうと思つたのである。そんなことから、彼はクラスの寵を一身にあつめた。わかい群集は

英雄の出現に敏感である。ブルウル氏は、それからも生徒へつぎつぎとよい課題を試みた。Fact and Truth. The Ainu. A Walk in the Hills in Spring. Are We of Today Really Civilised? 彼は力いっぱいに腕をふるつた。さうしていつもかなりに報いられるのであつた。若いころの名譽心は飽くことを知らぬものである。そのとしの暑中休暇には、彼は見込みある男としての誇りを肩に示して歸郷した。彼のふるさとは本州の北端の山のなかにあり、彼の家はその地方で名の知られた地主であつた。父は無類のおひとよしの癖に惡辣ぶりたがる性格を持つてゐて、そのひとりむすこである彼にさへ、わざと意地わるくかかつてゐた。彼がどのやうなしくじりをしても、せせら笑つて彼を許した。そしてわきを向いたりなどしながら言ふのであつた。人間、氣のきいたことをせんと。さう呟いてから、さも拔け目のない男のやうにふいと全くちがつた話を持ちだすのである。彼はずつと前からこの父をきらつてゐた。蟲が好かないのだつた。幼いときから氣のきかないことばかりやらかしてゐたからでもあつた。母はだらしのないほど彼を尊敬してゐた。いまにきつとえらいものになると信じてゐた。彼が高等學校の生徒としてはじめて歸郷したときにも、母はまづ彼の氣むづかしくなつたのにおどろいたのであつたけれど、しかし、それを高等教育のせゐであらうと考へた。ふるさとに歸つた彼は、怠けてなどゐなかつた。藏から父の古い人名辭典を見つけだし、世界の文豪の略歷をしらべてゐた。バイロンは十八歳で處女詩集を出版してゐる。シルレルもまた十八歳、「群盜」に筆を染めた。ダンテは九歳にして「新生」の腹案を得たのである。彼もまた。小學校のときからその文章をうたはれ、いま

は智識ある異國人にさへ若干の頭腦を認められてゐる彼もまた。家の前庭のおほきい栗の木のしたにテエブルと椅子を持ちだし、こつこつと長編小説を書きはじめた。彼のこのやうなしぐさは、自然である。それについては諸君にも心あたりがないとは言はせぬ。題を「鶴」とした。天才の誕生からその悲劇的な末路にいたるまでの長編小説であつた。彼は、このやうにおのれの運命をおのれの作品で豫言することが好きであつた。書きだしには苦勞をした。かう書いた。

——男がゐた。四つのとき、彼の心のなかに野性の鶴が巣くつた。鶴は熱狂的に高慢であつた。

云々。暑中休暇がをはつて、十月のなかば、みぞれの降る夜、やうやく脱稿した。すぐまちの印刷所へ持つて行つた。父は、彼の要求どほりに默つて二百圓送つてよこした。彼はその書留を受けとつたとき、やはり父の底意地のわるさを憎んだ。叱るなら叱るでいい、太腹らしく默つて送つて寄こしたのが氣にくはなかつた。十二月のをはり、「鶴」は菊半裁判、百餘頁の美しい本となつて彼の机上に高く積まれた。表紙には、鷲に似た妙な鳥がところせましと翼をひろげてゐた。まづ、その縣のおもな新聞社へ署名して一部づつ贈呈した。一朝めざむればわが名は世に高いさうな。彼には、一刻が百年千年のやうに思はれた。五部十部と街ぢゆふの本屋にくばつて歩いた。ビラを貼つた。鶴を讀め、鶴を讀めと激しい語句をいつぱい刷り込んだ五寸平方ほどのビラを、糊のたつぷりはひつたバケツと一緒に兩手で抱へ、わかい天才は街の隅々まで駈けずり廻つた。

そんな譯ゆゑ、彼はその翌日から町中のひとたちと知合ひになつてしまつたのに何の不思議

もなかつた筈である。

彼はなほも街をぶらぶら歩きながら、誰かれとなくすべてのひとと默禮を交した。運わるく彼の挨拶がむかうの不注意からそのひとに通じなかつたときや、彼が昨晩ほね折つて貼りつけたばかりの電柱のビラが無慙にも剥ぎとられてゐるのを發見するときには、ことさらに仰山なしかめつらをするのであつた。やがて彼は、そのまちでいちばん大きい本屋にはひつて、鶴が賣れるかと、小僧に聞いた。小僧は、まだ一部も賣れんです、とぶあいそに答へた。小僧は彼こそ著者であることを知らぬらしかつた。彼はしよげずに、いやこれから賣れると思ふよ、となにげなささうに豫言して置いて、本屋を立ち去つた。その夜、彼は、流石に幾分わづらはしくなつた例の會釋を繰り返しつつ、學校の寮に歸つて來たのである。

それほど輝かしい人生の門出の、第一夜に、鶴は早くも辱かしめられた。

彼が夕食をとりに寮の食堂へ、ひとあし踏みこむや、わつといふ寮生たちの異様な喚聲を聞いた。彼等の食卓で「鶴」が話題にされてゐたにちがひないのである。彼はつつましげに伏目をつかひながら、食堂の隅の椅子に腰をおろした。それから、ひくくせきばらひしてカツレツの皿をつついたのである。彼のすぐ右側に坐つてゐた寮生がいちまいの夕刊を彼のはうへのべて寄こした。五六人さきの寮生から順々に手わたしされて來たものらしい。彼はカツレツをゆつくり噛み返しつつ、その夕刊へぼんやり眼を轉じた。「鶴」といふ一字が彼の眼を射た。ああ。おのれの處女作の評判をはじめて聞く、このつきさされるやうなをののき。彼は、それで

も、あわててその夕刊を手にとるやうなことはしなかつた。ナイフとフオクでもつてカツレツを切り裂きながら、落ちついてその批評を、ちらちらはしり讀みするのであつた。批評は紙面のひだりの隅に小さく組まれてゐた。

——この小説は徹頭徹尾、觀念的である。肉體のある人物がひとりとして描かれてゐない。すべて、すり硝子越しに見えるゆがんだ影法師である。殊に主人公の思ひあがつた奇々怪々の言動は、落丁の多いエンサイクロペヂアと全く似てゐる。この小説の主人公は、あしたにはゲエテを氣取り、ゆふべにはクライストを唯一の教師とし、世界中のあらゆる文豪のエツセンスを持つてゐるのださうで、その少年時代にひとめ見た少女を死ぬほどしたひ、青年時代にふたたびその少女とめぐり逢ひ、げろの出るほど嫌惡するのであるが、これはいづれバイロン卿あたりの飜案であらう。しかも稚拙な直譯である。だいいち作者は、ゲエテをもクライストをもただ型としての概念でだけ了解してゐるやうである。作者は、フアウストの一頁も、ペンテズイレエアの一幕も、おそらくは、讀んだことがないのではあるまいか。失禮。ことにこの小説の末尾には、毛をむしられた鶴のばさばさした羽ばたきの音を描寫してゐるのであるが、作者は或ひはこの描寫に依つて、讀者に完璧の印象を與へ、傑作の眩惑を感じさせやうとしたらしいが、私たちは、ただ、この畸形的な鶴の醜さに顏をそむける許りである。

彼はカツレツを切りきざんでゐた。平氣に、平氣に、と心掛ければ心掛けるほど、おのれの動作がへまになつた。完璧の印象。傑作の眩惑。これが痛かつた。聲たてて笑はうか。ああ。

顔を伏せたままの、そのときの十分間で、彼は十年も年老いた。

この心なき忠告は、いつたいどんな男がして呉れたものか、彼にもいまもつて判らぬのだが、彼はこの屈辱をくさびとして、さまざまの不幸に遭遇しはじめた。ほかの新聞社もやつぱり「鶴」をほめては呉れなかつたし、友人たちもまた、世評どほりに彼をあしらひ、彼を呼ぶに鶴といふ鳥類の名で以てした。わかい群集は、英雄の失脚にも敏感である。本は恥かしくて言へないほど僅少の部数しか賣れなかつた。街をとほる人たちは、もとよりあかの他人にちがひなかつた。彼は毎夜毎夜、まちの辻々のビラをひそかに剥いで廻つた。

長編小説「鶴」は、その内容の物語とおなじく悲劇的な結末を告げたけれど、彼の心のなかに巣くつてゐる野性の鶴は、それでも、なまなまと翼をのばし、藝術の不可解を嘆じたり、生活の倦怠を託つたり、その荒涼の現實のなかで思ふさま懊惱呻吟することを覺えたわけである。

ほどなく冬季休暇にはひり、彼はいよいよ氣むづかしくなつて歸郷した。眉根に寄せられた皺も、どうやら彼に似合つて來てゐた。母はそれでも、れいの高等教育を信じて、彼をほれぼれと眺めるのであつた。父はその惡辣ぶつた態度でもつて彼を迎へた。善人どうしは、とかく憎しみ合ふもののやうである。彼は、父の無言のせせら笑ひのかげに、あの新聞の讀者を感じた。父も讀んだにちがひなかつた。たかが十行か二十行かの批評の活字がこんな田舍にまで毒を流してゐるのを知り、彼は、おのれのからだを岩か牝牛にしたかつた。

そんな場合、もし彼が、つぎのやうな風の便りを受けとつたとしたなら、どうであらう。や

がて、ふるさとで十八の歳を送り、十九歳になつた元旦、眼をさましてふと枕元に置かれてある十枚ほどの賀状に眼をとめたといふのである。そのうちのいちまい、差出人の名も記されてないこれは葉書。

——私、べつに悪いことをするのでないから、わざと葉書に書くの。またそろそろおしよげになつて居られるころと思ひます。あなたは、ちよつとしたことにでも、すぐおしよげなさるから、私、あんまり好きでないの。誇りをうしなつた男のすがたほど汚いものはないと思ひます。でもあなたは、けつして御自身をいぢめないで下さいませ。あなたには、わるものへ手むかふ心と、情にみちた世界をもとめる心とがおありです。それは、あなたがだまつてゐても、遠いところにゐる誰かひとりがきつと知つて居ります。あなたは、ただすこし弱いだけです。弱い正直なひとをみんなでかばつてだいじにしてやらなければいけないと思ひます。あなたはちつとも有名でありませんし、また、なんの肩書をもお持ちでございません。でも私、をととひギリシヤの神話を二十ばかり讀んで、たのしい物語をひとつ見つけたのです。おほむかし、まだ世界の地面は固つて居らず、海は流れて居らず、空氣は透きとほつて居らず、みんなまざり合つて混沌としてゐたころ、それでも太陽は毎朝のぼるので、或る朝、ヂユーノーの侍女の虹の女神アイリスがそれを笑ひ、太陽どの、太陽どの、毎朝ごくらうね、下界にはあなたを仰ぎ見たてまつる草一本、泉ひとつないのに、と言ひました。太陽は答へました。わしはしかし太陽だ。太陽だから昇るのだ。見ることのできるものは見るがよい。私、學者でもなんでもな

いの。これだけ書くのにも、ずゐぶん考へたし、なんどもなんども下書しました。あなたがよい初夢とよい初日出をごらんになつて、もつともつと生きることに自信をお持ちなさるやう祈つてゐるもののあることを、お知らせしたくて一生懸命に書きました。こんなことを、だしぬけに男のひとに書いてやるのは、たしなみなくて、わるいことだと思ひます。でも私、恥かしいことは、なんにも書きませんでした。私、わざと私の名前を書かないの。あなたはいまにきつと私をお忘れになつてしまふだらうと思ひます。お忘れになつてもかまはないの。おや、忘れてゐました。新年おめでたうございます。元旦。

（風の便りはここで終らぬ。）

あなたは私をおだましなさいました。あなたは私に、第二、第三の風の便りをも書かせると約束して置きながら、たつぷり葉書二枚ぶんのをかしな賀状の文句を書かせたきりで、私を死なせてしまふおつもりらしゆうございます。れいのご深遠なご吟味をまたおはじめになつたのでございませうか。私、こんなになるだらうといふことは、はじめから知つてゐました。でも私、ひよつとするとあの靈感とやらがあらはれて、どうやら私を生かしきることができるので

はないかしら、とあなたのためにも私のためにもそればかりを祈つてゐました。やつぱり駄目なのね。まだお若いからかしら。いいえ、なんにもおつしやいますな。いくさに負けた大將は、だまつてゐるものださうでございます。人の話に依りますと「ヘルマンとドロテア」も「野鴨」も「あらし」も、みんなその作者の晩年に書かれたものださうでございます。ひとに憩ひを與へ、光明を投げてやるやうな作品を書くのに才能だけではいけないやうです。もしも、あなたがこれから十年二十年とこのにくさげな世のなかにどうにかして炬火きどりで生きとほして、それから、もいちど忘れずに私をお呼びくだされたなら、私、どんなにうれしいでせう。きつときつと參ります。約束してよ。さやうなら。あら、あなたはこの原稿を破るおつもり？　およしなさいませ。このやうな文學に毒された、もぢり言葉の詩とでもいつたやうな男が、もし小説を書いたとしたなら、まづざつとこんなものだと素知らぬふりして書き加へでもして置くと、案外、世のなかのひとたちは、あなたの私を殺しつぷりがいいと言つて、喝采を送るかも知れません。あなたのよろめくおすがたがさだめし大受けでございませう。そしておかげで私の指さきもそれから脚も、もう三秒とたたぬうちに、みるみる冷くなるでございませう。ほんたうは怒つてゐないの。だつてあなたはわるくないし、いいえ、理窟はないんだ。ふつと好きなの。あああ。あなた、仕合せは外から？　さやうなら、坊ちやん。もつと惡人におなり。

男は書きかけの原稿用紙に眼を落してしばらく考へてから、題を猿面冠者とした。それはどうにもならないほどしつくり似合つた墓標である、と思つたからであつた。

青空文庫情報

底本：「太宰治全集2」筑摩書房
　1998（平成10）年5月25日初版第1刷発行
底本の親本：「晩年」第一小説集叢書、砂子屋書房
　1936（昭和11）年6月25日
初出：「鷭　第二輯」
　1934（昭和9）年7月1日発行
入力：赤木孝之
校正：湯地光弘
1999年6月15日公開
2016年2月23日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

猿面冠者

太宰治

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/